
ザンショのもとに ～オレと真夏～

kokoa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザンシヨのもとに　　＼オレと真夏＼

【Nコード】

N4564P

【作者名】

k o k o a

【あらすじ】

中学校三年の二学期。

最後の修学旅行でやってきたのは夢の世界と呼ばれるテーマパーク「ディティニーワールド」。

そしてオレと同じグループには、オレの好きな人水野真夏がいた。そしてオレは今日、中学三年間の思いを伝える。

……ことができるのかねえ？

なんてったってオレはチキンハート野郎だからな。
まあ、温かく見守ってやってくださいよ！

九月のザンショ（前書き）

一応恋愛もののつもりですが、恋愛ものとして読むと物足りないかもしれません；

コメディ―小説ということではひとつ……。

ある中学生の修学旅行のお話です。

九月のザンショ

オレの左斜め前を、真夏の元気な太陽とも秋の寂しげな太陽ともつかない笑顔で歩く彼女。その笑顔には気品があるが、おとなし過ぎることもない。それはさながら、九月の空の残暑のようであった。

時刻は午前十時。

制服姿のオレとその他五人の生徒のグループは『ディティニーワールド』の入場門辺りにいた。すでに入場は済ましてある。

やっと入って来たぜっ。

オレは目の前にそびえる『Welcome』と書かれた巨大なアーチを見て、ますますテンションが上がった。

そして、それを押さえきれずにこう言葉が漏れる。

「おおおお……」

ディティニーワールドとは国内でも最大級のテーマパークで「夢の世界」がコンセプトの可愛い雰囲気である。まさに夢の世界という言葉がしっくりくる。一見子ども向けに思えるがそんなことはなく、若いカップルから家族連れまで幅広い層の客を集めている。親がファンになってしまったということも少なくない。

凄いな。平日というのにどこを見ても人、人、人だ。しかもその顔はどれも笑顔でよほど幸せなんだな、と思わせる。

それを見るとこっちも自然に笑顔になっちまう。

「おっしやあああ！ 来たぜディティニーワールドオー！」

そう叫んでしまうオレ。だって、楽しんだもん。しゃーねーじゃん。

しかし、そんなオレをキチガイかとも思ったらしく、トシが冷たい目で見てきた。

「え……、何テンション上がってんの。はずいからやめてくんね？」

と言つてきよろきよと周りを確認するトシ。

それと同時に言葉の刃が自分の胸に刺さったのを確認するオレ。
す、すまない。あまりにもテンション上がって自制心がきかんかった。

は、恥ずかしい。自分で叫んどいてなんだけど、オレはバカか。
この歳になつてこんなに大はしゃぎする人間で客観的に見ておかし過ぎるわ。

だってオレ、そんなやつ見たらマジで引くもん。トシの気持ちがよく分かったよ。そりゃあんな言葉の一つでも吐きたくなるわ。
にしてもあの一言は傷ついたぞ……。こいつマジで毒舌なんだよな！。

オレは前を歩くトシをまじまじと見る。

本名は野中俊雪。のなかとしゆきもちろん男だ。

髪の毛は短いが多く、ワックスかなんかでふんわりとさせている。悔しいがこの毒舌、オレと違ってなかなかいいルックスをしてやがる。どつちかというとかわいい系だな。

こいつとは中学三年間通してずっとつるんでいて、親友と言つてもいいほどだと自分で勝手に思っている。トシはどう思ってるかは知らないが、仲がいい事に変わりはないと思う。

「なにはしゃいでんの？」

そう言い放つてから、まさに猛暑日の太陽のように元気に爆笑する彼女。

彼女の名前は菜月。かわはら なつき川原菜月だ。第一印象はとにかく『明るい』だ。

まあ、なんだ……。胸は……。うん。体育の時なんかは目のやり場に困るもんだ。だって、別にっ、見たいわけじゃないよっ？ 見たいわけじゃ、ないけどっ油断すると目が勝手にそっちにいつちゃうんだよっ！ ホントに見たいわけじゃ、ないんだからねっ。

それにオレは適度にあつた方が好きだ。

……。つて何のカミングアウトだよ

自分で自分につっこみを入れてしまおうオレ。

その時、ふとピンク色のあまつたるい声が聞こえたので反射的にそちらを向く。

ああ、やっぱりあんたらか。

「ねえー。キスしよつかあ」

マ、マジか……。こんな公共の場でしかも真昼間から？ ない。オレの中にはそんな文化ないぞ。ありえねえ。

そんなオレから見て特殊な文化を持った女は、小林紗希^{こはやし さき}。肩の辺りまで伸びた髪の毛をブラウンに染めている。そこで彼女ががっちりと手をつなぐ相手が矢木沼準^{やぎぬま しゅん}。そして準はみんな制服だというのは堂々と派手派手なジャージをきている。黒をベースに白いラインが入っていて、背中には白い大きな羽が描かれている。

でき物一つない綺麗な顔。そして長めの金色の髪を一部つんつんと立てている。

一見すると不良っぽい。っていうか不良だ。たびたび警察のお世話にもなっている。学校で呼出しを食らうのも日常茶飯事だ。

だが友達思いのいいやつで、オレは準のことは嫌いじゃない。むしろ好きだ。大好きだ！ 友達的な意味でな。

小林と準。

この二人はいうまでもなく付き合っている。そしてそのことは学校中で知らない者はいないほど有名な話だ。

それに隠すつもりも無いようだしな。そういうところは良いと思うが、人前で「キスしよつか」が出るのはさすがにやりすぎだと思う。

そんなオレの気持ちを察したかのように準が言う。

「バカか。そんなん、こんなとこでできねえよ」

やっぱりしつかりやつだ。

不良だからって悪いやつばかりじゃない。見た目がいかついで、内面はすごくしつかりしているのだ。

「だからあとでゆっくーり、なっ」

前言撤回。

その「ゆつくーり」っていうのが意味ありげで、なんかエロいんですけど。

訂正。内面は凄くエッチなやつでした。まあ今に始まった事じゃないんだけどね。学校でも女子の前で普通に下ネタ言うし。

そんなオレ達は「Welcome」と書かれた可愛らしい大きなアーチをくぐった。ちょうど真下から見るとどれだけ大きいかがよくわかる。たぶん普通の一軒家ぐらいの高さはあるだろう。

そのアーチをくぐると、そこはまさにファンタジーの世界にでも迷いこんだと錯覚するほどだった。

両サイドにはヨーロッパ風のレンガ造りの建物が建ち並び、百メートルほど先まで続いていた。

赤や茶色や肌の色のレンガで造られた一軒一軒が「夢の世界」を醸し出している。

いいなあ……。こういう雰囲気。

オレはこういうヨーロッパみたいな雰囲気がめっちゃ好きだ。自分でも理由はよくわかんないけど、知らぬまに好きになってた。

オレはしばしの間、建ち並ぶレンガの家々に見とれていた。

これならずと見ても飽きないな。

そうだ、学校もヨーロッパ風の造りにしたら飽きずに勉強がはかどるんじゃないか？　ねえ、みんなもそう思うよね？

そんなばかばかしい考えに更けっていると、もうみんなは歩きだしていた。

オレも小走りで追い付く。

おっと。そういや、まだオレの名前を言ってなかったな。

オレは五十嵐和優^{いがらし かずひろ}。仲のいいやつはオレのことを「カズ」って呼んでる。半袖のカッターシャツに学校の制服のズボンというごく

普通の中学三年生。

特にこれといった趣味もない。ただ、もう引退してしまったが一応陸上部には入ってた。だからって特別足が速いってわけでもねーけどな。

……ただ今日は大切なことが一つある。まあいずれ分かるさ。

九月下旬。

夏休みが終わってからしばらくたって、二学期にもなれてきたころ。当然オレ達には受検が控えている。

この行事が終われば、受検に向かって勉強するだけ。つまらなく、退屈な日々。

でも今日だけは、学校も勉強も受検もみんな忘れていいんだ。昨日で「修学」の部分は終わった。あとは「旅行」の部分をおもいっきり楽しむだけだ。

「修学旅行ばんざーい!!」

「へ？」

目を点にする菜月。

次いでトシが冷たく言い放つ。

「何？ おまえ頭いかれた？」

し、しまった。心の声が漏れてしまった。

それにしてもトシの一言にはグサツとくるぜ……。

オレは無意識に上がってしまったていた両腕を居心地悪くゆつくりと下ろした。

まったく酷いやつだよ。あのバカップルはこちらに見向きもしないでやんの。

そんな中、オレの左斜め前を歩く彼女だけは違う反応を見せた。口元をちょこんとかわいく押さえ、真夏の元気な太陽とも秋の寂しげな太陽ともつかない笑顔でこちらを半分振り向いて見ていた。

か、かわいい……。

肩甲骨の辺りまで伸ばしたつややかな黒髪。整った顔立ち。比較的白いはだ。オレを流し見るその綺麗な瞳。すらっと高い背。

思わず見とれてしまう。いつもは髪を結んでいるせいか、おろした髪が実に綺麗で似合っていた。

オレはこっちの方が好きだ。

その時になってやっと目が合っていることに気づいた。オレは瞬時に目を伏せる。顔面がほのかに熱くなるのを感じた。

もしかして数秒見つめてた？ やべっ。すっげー恥ずかしい。再び顔を上げると、もう向こうを向き菜月としゃべっていた。

オレは斜め後ろから見えるわずかな笑顔に見とれていた。

オレが彼女の存在を知ったのは中学に上がって初めての期末テストが終わったあとの事だった。

彼女の名前は水野真夏みずの まなつといった。

「今回もまた水野だつてよ学年一位」

「へえ。頭いんだそいつ」

「家がすっげー金持ちらしいぜ」

近くの席からそんな会話が聞こえた。

へえ、水野ねえ。知らん名だな。少なくともオレと同じ小学校じゃないな。

そんなことをどうでもいいように考える。

さらに会話は続いた。

「その人って何組？」

「ええとね……、あつ、そこにいるじゃん。ほら」

そう言つて廊下を指さす。

学年一位つてどんなやつになるんだろうな。インキヤラで眼鏡かけてて、角刈りか？ ぶっ。自分の想像に吹き出した。

どんなやつなのかなって。

オレはなんともなしに廊下に目をやる。そして指さした先には…

…。

オレの想像した姿とは全く異なるものだった。
見たかんじインキヤラではない。眼鏡もかけてない。角刈りでもない。……ってかまず男じゃない。

友達と楽しそうにしゃべる彼女の笑顔は夏の元気な太陽とも秋の寂しげな太陽ともつかない笑顔で、金持ちの嬢ちゃんを全く感じさせない。

後ろで一つに縛ったつややかな黒髪。整った顔立ち。比較的白いはだ。その綺麗な瞳。すらっと高い背。おそらくオレより高い。

か、かわいい。

顔自体はかわいいというより綺麗なのだが、その笑顔や仕草からかわいいという印象を受ける。

その時オレは故郷を懐かしむようなよく分からん思いが胸でうずまいていた。一言で表すならキュンとした。胸が一瞬だけ締めつけられるようなそんな感じ。

やばいなこれ。なんだこれ。オレはどうしたの。

この胸にぐつとくる感じ。うまく言い表せない。

簡単に言つとやはり「キュン」というありきたりなものになってしまう。

これはどこから来るものなのか。

さっきの笑顔なのか彼女の仕草なのかそれとも容姿なのか。それもなくわからない。彼女を見た瞬間に感じた、それだけ。

その後もテストがあるたび彼女の話が所々で聞こえた。

そしてオレは最高学年になった。

そして彼女と同じクラスになった。

素直に嬉しかった。そりゃあ一言交わすたびに胸が「キュン」という感覚に襲われるけど、別に嫌ではなかったから。

そして同じクラスで顔をあわせるようになってしばらくたつと、

あの「キュン」という感覚の正体が分かった。

しかも、あっさりと受け入れることができた。

それは「好き」だから。

話すようになってからはっきり分かった。

オレは水野真夏のことが好きなんだって。

いつから好きだったのかは分からない。どうして好きになったのかも分からない。たぶん探しても探しても見つからないだろう。

もし見つかったとすれば、それはただ理由がほしかっただけに過ぎない。

本当の理由なんて分からない。

ただただ好き。うまく話そうとするほど言葉が出てこなくて、緊張して、「好き」と伝えることなんかできなくて。

……せつかく築いた関係を崩したくなくて。

だから今まで告白なんかできなかった。できるわけがなかった。

このままでもいいか、とも思った。別に話せるし。

でも我慢できなかった。この思いを伝えなきゃ、伝えたい。

だから今日オレは絶対に告白する。手紙やメールなんかには頼らない。自分の口でちゃんと伝える。

しっかりと。

九月のザンシヨ（後書き）

よければ、作者に駄目だしをしてみてください♪

二つのキーホルダー

オレは隣りにいる真夏をちらつと見た。

レンガの建物の中に制服姿というミスマッチに見える組み合わせだったが、そんな違和感を感じさせない様子だった。

バックの噴水が似合うせいもあるかもしれない。

このヨーロッパ風の建物が建ち並ぶ道のちょうど中心に置かれた噴水にはベンチがあり、休憩する人や待ち合わせの人々が集まっていた。

同じ学校の生徒の姿もちろはらと見受けられる。

「先におみやげ買いに行かない？」

そう口を開いたのは菜月だった。

へ？ 何だつて？

た、確かに学年主任のじじいが言ってたけどさあ……。

「帰りは絶対に混むので、お土産は先に買っておくのがよいでしょう」

ってな感じで偉そうに。しかも得意気に。

あんたに何が分かるってんだ。下見しただけだろう？

おもいつきり遊んだあとに余韻に浸りつつ買うお土産がどんなに良いものなの知ってるのかよ。

「今日楽しかったね」っていいながら買うお土産がどんなにいい思い出になることか。オレはそれを小学校の時の修学旅行で学んだぜ。

お揃いにしよう。つつつて友達と同じもん買って学校に持ってつてたんだよ。そしたら思い出すだろうが。

先にお土産買うとかアホだね。半分は損してるよ。
だから最後にしようぜ？

おもいつき「え〜！」という気持ちを全身に込めた態度をとる。
このときのオレはさぞかしガキっぽく見えたであろう。

「先生も言ってたし先に行こっ？」

オレの心の叫びは通じなかったらしく、菜月がさらに押す。

だから、何故先生の言うことを鵜呑みにする。

確かにすいてると思うよ？ その点は認める。でもさあ、楽しみつてもんがあるだろ。遊び終わってから買うからこそのお土産だろ。

「私はいいよ？」

え〜っ。かわいい顔で賛成しちゃったよ。好きな人に向かって失礼だけど、あんたアホでしょ？

学年トップといっても大したことないな。

楽しみかたの知識はオレのが断然上だ。まあ勉強は中の上といったところだけだな？

「そうだな」

トシ、おまえまでもかつ！

おまえとは親友だと思ってたのに……。くそっ。

ということで多数派意見に従い、先にお土産を買うことになった。
ちなみにあのバカップル二人は「どっちでもいいよ」と、特に小林は準以外興味ないといった風で、ずっとイチャイチャしていた。

まさに「ラブラブチュッチュ」という言葉が一番しっくりくる様子だった。

そして一軒の店の前に来たときも二人は「ラブラブチュッチュ」
していた。正確にいうとチュッチュはしていない。

これは二人のラブラブ度合を表すもので、実際の行動とは異なる場合があります。ご了承下さい。

それにしても熱いお二人さんだぜ。こっちが恥ずかしくなってくるぐらいだもんな。

付き合い始めてもうすぐ一年ぐらいじゃないか？　そう考えると長いよな。準だけに純愛ってやつだな。

……………　　っう、うん。

まあ、つまりだな。準は不良だからってチャラチャラと女の子をとっ換えひっ換えするようなやつじゃないって事だ。

さてみんなの意見に従い、渋々について来たわけで。

オレはみんなと数あるうちの一軒の店の前に立っているわけだが、この店もレンガできていて、やはりファンタジーの世界を思わせる。かわいいコビトでも出てきてもおかしくない雰囲気だ。

数あるうちの一つに何故この店をみんな（主に菜月だろう）が選んだ理由はなんとなく分かるような気がした。

まず一つ目、見渡す限りではこの店が一番大きいため。

二つ目、店の見た目が目立つしかわいい。

どのようにかわいいのかというと、看板が丸太のような形に形どられた物で、その上には「ディティニワールド」のキャラクターである、リスをデフォルメしたような姿の「ハイド」と「チョコ」がちよこんと乗っている。「ハイド」はさながらカーボーイのような帽子をかぶっていることからオスと思われ、「チョコ」はピンクのリボンを頭に乗せていることからメスだと思われる。

そして、そのかわいらしい看板には「D i t e n y W o r l d S H O P」とやはり可愛らしい字体で書かれていた。それはケーキに文字を書くときのように書かれており、かじったら甘そうだ。チョコの味とかすんじゃないかな。

まあ話は多少逸れたが、おそらくこの二つの理由から選んだのだろう。

どんな物事でも見た目は大事だからな。

準は文句なくかつこいいし、紗希だって化粧で誤魔化している部分も多少はあるだろうがまあまあ可愛い。だから付き合ったのだろう。もちろんそれだけでは決して無いんだろう。

それはオレもよく分かるよ。なんで水野真夏のことが好きなのかわ自分でもよく分からんからな。

オレはかわいらしい看板をちらつと見やってから、みんなに続いて店の中へ入っていった。

店内の広さはコンビニの約二倍くらいで、棚には沢山の「ディティニーワールド」のキャラクターのグッズやら、お土産用のお菓子などが並んでいた。

意外に人いるじゃん。

まあ、帰りはこの倍以上になって店内を移動するのもままならなんだろう。それとくらべたら悠々移動できるスペースは空いているし、混んでいるとゆうことにはならんだろう。

オレは足を進めた。

かわいいキャラクターのぬいぐるみやキーホルダーが基本的に目立っていて、店内はかわいらしい雰囲気、童心を思い出させるような暖かい気持ちにさせてくれる。

なんかよう分からんがワクワクしてくんな。ちっちゃいころ誕生日の前日ってこんなような気持ちだった気がするよ。

オレはワクワクすると同時に懐かしい気持ちに浸っていた。それは誕生日の前日、またはクリスマスにサンタを待つような子どもの気持ちに似ていた。

みんなは思い思いに店内をまわっているようだった。

じゃあ、オレも自由にさせてもらおうとするか。

オレも店内を歩き始めた。

オレは迷わずある場所を目指した。オレは来る前から買うものは決めていた。少し当初とは予定が狂ったがかわらない。むしろ都合かもしれない。

オレが向かった先は、キーホルダー類が沢山並んでいるゾーンだった。かわいらしいキャラクター達がオレを出迎える。

みんなこつちを向いて、「僕と一緒に連れてって」と懇願しているようだった。

くそう。このかわいさは犯罪だな。そんな目で見つめられたら買わずにはいられんだろ。ある意味での脅迫だろ、コレ。

だが、オレは二つしか買わんぞ二つしか。お前らの脅しになんか乗ってたまるかっぺんだ。

オレは綺麗に並べられたキーホルダー群を見たり手に取ったりしながら吟味した。

クマのようなやつや、ネコやらが目についたので動物系ばかりかと思いきや、おばけやドラゴンなどもあって、やはりファンタジーの世界だなと思った。

こいつらは相変わらず「買って、買って」と訴えてきやがるな。

それこそ捨てられた仔犬か仔猫みたいにな。くそっ、そんな目で見んじゃねえよお。

でもなんで二つかって？

それは、水野にあげるためだ。

本当は告白が成功してから買って渡そうと思ってたんだけど、予定が狂っちゃったからな。こうして今買ってるわけ。

でも先に買ったからには絶対に告らなきゃって思うよ。そこで先ほどの「むしろ好都合かもしれない」につながってくるわけ。

まあ成功しなかった場合（そんなこと考えたくないけど……）、同じもん二つ持って帰ることになるんだけどさ。その時は妹にでもあげるよ。

オレは吟味した結果、この店という名のダンボール箱から助け出してやる捨て犬を選び出した。

まあ簡単にいうと二ワトリをデフォルメしたようなやつだ。片方はトサカが青で、もう一方はトサカがピンクのやつ。こっちを水野にあげよっ。

何よりの選出理由は目が飛び出してておもしろかったからだ。

選ばれなかった捨て犬達はこちらを怨めしそうに見上げていた。

「なんで私じゃないの？（うるうる）」とでも言っただった。くそっ。そんな目でオレを見るな！

そう心の中で叫んで目を逸らす。

もう一度見る。

「くそおお！」

これでいいだろ、これで！ もう許してくれー。

オレの右手にはネコが黒いハットをかぶったようなキーホルダーが握られていた。

結局キーホルダー達に負けてしまったオレはあきらめてこの場をさろつと回れ右した。

なっ、なななっ………！

おいおい、まじかよ。オレは言葉も発することができなかったね。直立不動で口をあぐり開ける様はさぞかし間抜けに見えただろうよ。

あろうことかそこには水野が立っていたんだよ。

口をあぐり開けるオレを不思議そうに覗きこんでいる水野。確かにかわいいんだよ。かわいいんだけどさ。

この状況でオレは何を喋ればいいの？ 告れってか？ 無理だよ、無理無理。こんなとっさに、心の準備が出来てないオレにそれを望むのは酷なことだぜ。

そんな様子でテンパっているオレだったが、幸いなことに向こうから口を開いてくれた。

「どうしたの？ そんなに買って。しかも二つは同じものだよね」

くすつと笑う水野。

かわいい……。思わずドキツとしちゃったよ。

って、そんな場合じゃねーんだよ。状況悪化だよ。

まさか「あなたのために買ったんです。付き合ってくださいっ！」とは言えねーしょ。さっきも言ったが、オレみたいなチキン野郎に心の準備なしで告れっっていうのは無理なんだよ。恥ずかしさで死んじゃうよ。

となると必然的に嘘をつくという結果にたどり着くわけで。

「妹にお土産でさ」

こんな嘘しか思いつかなかつたさ。オレの頭はどうやら残念の塊でできているらしい。

実際、あなたに振られたら妹のものになってしまいかもしれないんだけどな。そうならないように最前はつくすけど。

途端、水野は目を細めて先ほどよりも笑顔になり一言。

「優しいんだね」

オレは一瞬胸が締めつけられたような感覚に陥った。しかし、それは苦しいものではなく、むしろ心地よさのようなものを感じた。

そしてその後にくる、鼓動の高鳴り。

オレの胸はキュンキュンドキドキだった。

なんつー笑顔だ。しかもそれで「優しいんだね」だぞつ。モテない男なら勘違いしちまってもおかしくねえよ。

まあ、生憎オレはネガティブ心配性野郎だから勘違いなんかはしないし、したくてもできない。ネガティブな心が邪魔してきやがるでもなあ……。オレはこの一言をまた聞きたいと思ったし、この笑顔を毎日、毎日見たいと思ったんだよ。

そして、オレが水野をこんな笑顔にさせてやりたい。そうも思った。

この思いを伝えたいとも思った。つーか伝えてやる。今日、この「夢の世界」で。

そのあとオレは家族に持って行ってやるためのお土産を選んでいった。

オレが今日持ってきた財布には一万円と小銭がちょっと。学校の決まりで一万円と決っているのだが、それ以上持ってきているやつは多い。むしろそちらの方が多い。オレみたいなのは少数派だ。

てか、一万円ばつちじゃ足りねーだろ！

オレの親は決まり事とかには特にうるさくてな。一万円つつたら一万円って譲らない人なのよ。

あんたにも買っていくんだからその分ぐらいは出せよっー話
っすわ。

まあそんな事が言えるわけがなく……。だってそんな事言おうも
んなら「じゃあ出さなくてもいいんだからね」ってなりかねんし。

一応こっちは貰ってる立場だし、少なくとも感謝はしてる。

っーことで、この財布の中身を一日どうやってやりくりするかだ
な。

さっきのキーホルダーで千円と五百円強使っちゃったから、残り
は九千円弱といったところか。

くそー、この野良ネコめ。余計な金使わせやがって。

オレは買ひもの籠の中に入っている、小洒落たハットをかぶった
ネコのキーホルダーを一瞥する。「けけけっ、ありがとな」とでも
言ってそつだ。

まあ使っちゃったもんはしょーがねー。諦めて次のこと考えよ。

オレは思案の結果、菓子でも買っていくことにした。

一人一人に何か選んで買っていくのはめんどくさいし、金がかか
る。菓子なら一箱買えば全員分になるし、個別に買うよりは安く済
むからな。

それで、オレは菓子が売っている一角にいるのだ。

キャラクターが描かれた箱や缶。さらにはキャラクターの形をし
たクッキーやチョコなどまであった。

これなんか可愛くていいんじゃないかな。

オレは透明な箱に入っているお菓子のサンプルを見て思う。包装
はハロウィーン調で、それに入っているクッキーは可愛いおば
けの形をしている。

なんだか食べてしまうのも申し訳ないぐらい細かくつくられてい
る。

っていつか、さっきから気になってはいたんだが、オレの横にい
る子。どう思うよ。

いや水野が横にいるからって困っているわけではないんだよ？

むしろ嬉しいし、良い意味でドキドキしてる。

笑顔で楽しそうに買いものしてるようだしオレとしてはめっちゃくちゃいいんだよ、この位置関係。

その笑顔はすっごくかわいいし、それを真横から、しかもこんな近くから見れるんだから。正直、油断するとずっと見とれてしまいそうなほどドキツとしてる。

……だがなあ、オレのそんな心配はすぐにふっ飛んじまったよ。彼女の買いもの籠を見てみる！

まず、高々と積み上げられたお菓子の箱タワー。数にして十箱弱くらいはある。そしてその周りを装飾するキーホルダー群。これはオレの位置からは全体を把握することはできないが、タワーに隠れている分も考えると十四、五個といったところだろう。その他にクリアファイルやシャーペンなどの細かいものもある。

どっからそんな金が出てくんのよ！　とても一万円では足りん額だぞ。

……そういや、水野の家って金持ちなんだっけ。勉強ができるってイメージが強いから時々忘れる。彼女が金持ちですよオーラを出してないっていうのもある。

でも今回ばかりはばんばん出てるけどな。

「水野、なんでこんなに沢山買ってるの？」

オレは少し緊張しながらも疑問に思っていたことをついに口に出した。

水野は突然のオレの言葉に少し驚いたようにこちらを向く。さっきから隣りにいたとはいえ言葉は交わしてなかったからな。

ていうか顔近っ！

真横にいるってのは分かってたけどこんなに接近していたとは。人の頭一個分くらいしか間がないよ。

ともあれ、少し当惑した顔も凄くかわいい。

水野はどんな表情をしてもかわいいな。そう思うオレは恋の病にかかっているのかもしれない。否定するつもりはないし、それは

それでいい。

オレが質問してから三秒ほど間があいてから水野が口を開いた。
「ま、まあいろいろだよ？ 親戚の分とか部活の後輩の分とか」

水野は目を細めて笑顔になる。

ふむ、なるほど。それでこんなに買っていたのか。やっぱり水野は優しい。

にしても、この量は多くないか？ 「後輩一人一人に一箱ずつ買っていくわけじゃ……」とオレはいつのまにか声を漏らしていた。

「えっ……そうだけど」

ですよねっ。当たり前ですよ。あなたがそう言うならそれが正しいですよ。

やっぱり優しいよね。まあそれもこれもお金があるからこそ成せる技で……、いやオレ、金あってもそんな事ようせんわ。

それも後輩の分は親の金じゃなく自分の小遣いで買ったというから驚きだ。オレだったらそんな真似できねーな。水野はそれだけ後輩や家族を大切にしているということなんだろうな。

人を大切にする、女の子らしい、笑顔もかわいい、こんな子が付き合っていないなんておかしいだろ。

トシ達と、かわいい子の話になったときも水野の名前は一度たりとも上がらなかった。みんな見る目ないんじゃないの、とさえ思った。

でもその理由はなんとなく分かる。

「金持ちで頭がいい」そのイメージがしみついているもんだから、きつと。とくに「頭がいい」っていうのはあまり良いイメージを持つことはないんじゃないか。

ガリ勉。真面目。インキヤラ。みんなの持つイメージはそんなところだろう。だから、まず恋愛対象に入り難い。

でも彼女は違う。うまく説明できないけど、そう思っんだ。

性格、顔、声、仕草、雰囲気、全部、全部、全部。彼女の全部が好きだ。どこが好きかなんて分からない。「金持ちで頭がいい」そ

んなイメージも全部引つくるめた水野のことが好きなんだ。

わずか数センチの距離なのに彼女に思いは届かない。そこには目に見えない長い長い道があるようだった。

果してオレはその道の果てを見ることはできるのだろうか。そんな不安が頭を巡る。

オレは目の前の彼女を見た。

間違いなくオレに向けられているその笑顔。胸がキュンとなってドキドキして顔が火照る。

ずっと見ても苦にならない。

トシの顔なら十秒ほど見ただけで殴り飛ばしたくなるのにな。同じ人間の顔なのにどうしてこうも違うんだろうか。

そんな事を思っていると、目の前の彼女がふいに話しかけてきた。「どうしたの？」

オレは目が合っていたことに気づき、慌てて目を逸らした。

オレってたぶんずっと水野の顔見てたよな。絶対怪しまれた。

オレは今にも焦げてしまいそうな自分の顔を見られないように努める。

ヤバいつて、超恥ずかしいって！ 今なら恥ずかしさで死ぬる気がするって。

今、オレが「あー、顔赤くなってる（笑）！」なんて言われたら間違いなく自殺できる自信がたつぷりあるよ？ まあ水野はそんなこと言わないだろうけど。

「あー、カズ顔赤くなってる！」

なんでオレの予想通りのセリフ！？ 絶対死ぬ。これは自殺もんだぜ。ヤバいつてもう顔大変なことになってるよきつと。だってさあ赤道直下で顔面だけに日光浴びてるような感じだぜ？

顔から火が出るってこのことだな。この言葉考えた人誰だよ、オレ今すつごく共感してるよ。あんたもこんな気持ちだったんだな。最高の比喩表現だぜ。

ヤバい、熱さで思考までおかしくなってきた。

もう死がオレを迎えに来たようだ。じゃあなみんな。

「な〜に顔赤くしちゃってんの？」

ばんばんと肩を平手で叩かれる。

そしてオレは生き返る事ができた。

それにしてもいてえな。水野は絶対こんなことしないと思うんだけど。

オレは犬が顔についた水を飛ばす勢いでかぶりを振った。そして、そつと目を開ける。

そこにいたのは猛暑日の太陽のように笑顔の菜月だった。バカにしたようにはっはっはと笑い声を上げている。

そしてとどめの一言を放った。

「どうせエツチなこと考えてたんでしょ？」

な、何を言っただんだコイツは！ オレが好きな人の目の前で裸を想像してたとしてもいうのか？ あっ、それは言ってないか。オ、オレはかわいいと思っただけでそんな想像なんかしてないよ！？

ってかなんでオレの好きな人の前で、オレのイメージがマイナスになるようなこというの。確かに菜月はオレが水野のこと好きってこと知らないけどさ。

それにしても酷くない？ 仮にオレが水野のこと好きじゃなくても言っっちゃ駄目だろ。女の子は普通そういうの言われたら引いちゃうんだよ。

案の定、菜月の後ろに明らかに引いている水野がいた。

オレの恋ってここで終わりなの？ まだ長い長い道を歩きだしてもないよ。

早く、早く訂正しなければ。

「ち、違っよ水野？ コイツが冗談で言っただけだからな？」

オレは今なお笑顔で笑う忌々しい女を指さして、顔をヒクつかせて言った。

奈月は関係ねーしとばかりにそっぱを向いた。

くそ、このアマツ。オレがどんな思いでいるのか分かってんのか

？ いや、その顔は確実に分かってねえな。分かってほしくもない。くそイラつかせてくれるぜ。

そんなオレの様子を察したかのように水野が口を開いた。

「うん。分かってるよ……」

ははは。と笑ったが、その顔は半信半疑のように見えた。

駄目だ。まだ疑われてやがるな、オレ。そんなに信用できないのかなオレって。悲しくなってくるぜ。ぐすん。

「カズ、これどう？」

「ん？」

オレが落ち込んだままで顔を上げると、猫の耳が生えた黒いハットをかぶった菜月がこっちを向いていた。

くそう、なんでお前にこんなこと言わなきゃ……………。

「かわいいよ……」

なんねえんだよ。

そんなオレの気持ちをよそにとびきりの笑顔でご機嫌な様子の菜月であった。

二つのキーホルダー（後書き）

今回も読んでくださった皆さん。
本当にありがとうございます！！

次話も頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4564p/>

ザンショのもとに ～オレと真夏～

2010年12月16日16時25分発行